

消えたコウナゴ、何の予兆？ 石原義剛

伊勢湾口では春告げ魚であるコウナゴが消え、ワカメも若い芽が伸びない。

コウナゴは夏前、海水が15℃を超えると、海底の砂地に潜って夏眠にはいり、秋になり水温が下がって目を覚まし、冬にかけて産卵をする。

10年ほど前、寒中の2月に鳥羽の答志島で、大きなタモ網を使ってコウナゴを掬いとる伝統漁法を実見したことがある。そのコウナゴは体長20センチほど、産卵後の成魚で脂がのって旨かった。が、この伝統漁も止んでしまった。

3月になると、2艘の船で網を引き廻してとるバッチ網漁がはじまる。バッチとは網の形が股引（ももひき・バッチ）に似ているのでいう。対象は新子と呼ばれるコウナゴの稚魚である。この漁は終戦後の昭和20年代から盛んになり、伊勢湾に、現在も大小100船団以上が出漁している。

25年前、コウナゴ資源の減少が懸念されだし、先駆的な、獲り過ぎないための約束事を愛知・三重の漁業者が決めた。事前に調査操業をして新子の体長が3～4センチになると解禁する。解禁後も残りの数を20億尾と決め、そこまで来たと判断すれば操業を停止する。このような資源管理法が執りいれられ守られて来た。

ところが今春、コウナゴは有史以来はじめて禁漁に追い込まれた。毎年実施している事前調査で、コウナゴの姿が極端に少ないと判ったのだ。

漁師らは落胆を越えて衝撃を受けている。関係する水産研究者らは、夏眠時の水温が高く、魚体が弱ったことなどを理由としている。地球温暖化の影響かと。

或はナマズのように、コウナゴが大地震の予兆を感じて逃げたのではないと、憶測したくなる異常な事態だ。